

宗教の本義(承前)

中 村 凡 愚

前號に於て、宗教が人生の或種の手段としての必要の爲存在するのでなく、そは一偏に各自の求道心——宗教的要求を充たさんが爲に必要なので宗教とはこの衷心の要求に應じて組成された人生

の一大現象であることを述べ、全時にその宗教的要求なるものが如何なる性質のものであるかを大略述べた。で以下斯る要求に答へんとして起つた宗教が如何ある要素に依て組成され居るかを考へそして完全の宗教と云はるゝものは、それ等要素の内容形式が如何に按配されあるか、又されねばならぬかと考察して見やう。

宗教的要求なるものが前號所陳の如く各自根本心の覺醒、大生命の獲得に依つて自己生存の意義と安定とを確保する第一義の生活に入つて、全人格の靈化を來し智情意全心の統一せる大満足を得んどの希ひである以上、その要求に應やんとする

宗教が、何處までも智情意の各種要求を正當に實現し行く根本の力と光とを附與するの組織を持つたものでなければならぬ。そこで斯る組織を構成する重なる要素を擧ぐると第一が教義、第二に形式、第三行規、第四が教團である。これ等重なる要素の中でもその中心とあるものは云ふまでもなく教義で、他はこれが發現と云ふべきである。

宗教の中心要素たる教義には自ら智情意の究竟の要求たる眞善美の理想が掲げられ、そしてその三者の統一調和が遺憾なく示されてあらねばならぬ、そは何處までも中正を逸せざる哲學的眞理に基いた上に、純潔、幽雅、崇高、雄大等の善美の趣巧を有せるものにして始めてそれに依て各自觀智の明徹を來し、全時に情操の純美と意志の強大とを喚起し來るので、これ等三方面の統一を得た所に眞正の信仰安心が確立するのである。斯る教義の表現として莊重典麗なる儀式莊嚴と、嚴正周到ある行法規矩とが設定され、そを信受奉行する同志の徒を合同統理するの機關としてそこに教團

が成立する、のである。よつて今一々に就順て次露見所を吐せやうと思ふ。

眞善美究竟の理想を掲げて人心最後の示趣を歸す宗教義には其中に宇宙觀、神觀、人生觀（佛教では法界觀、佛陀觀、人身觀と云ふ）なる三種の觀察點がある。これ等三種の觀察究理が最も中正にして透明を得たものでなければ本より完全の教義とは云はれぬ。宇宙觀は神人兩觀の依て立つ基礎的原理を究明するので、これに依て神人の二觀も根據ある合理的の解案が得らるのである。宗教が神と人との關係であるとは屢々人の云ふ所であるが、この二者の關係の可能の理由を質さんとして廣く宇宙法界に觀察の眼を放つのが宇宙觀である。

斯くてそは宇宙の物心諸現象が如何に存立し、如何に發生し、如何に終始するかを達觀して万象が時間的に因果の軌道を辿つて推移運行し空間的に個々關聯しつゝ全一の渾然相を織りあせる事實を直寫し、物心の二者が一体の兩面、表裏相關の

趣致を道破し以て現象相互の各具通即を指摘し、併せてこれ等諸現象の基く宇宙其物の本體を究知し。及本體と現象との關係をも明示せんとするにあるので、宇宙の本體あるものは万象の外に超在せるでなく、そは万象を通貫して個々の裡に内在しつゝ一切を存立支持する宇宙の統一力であり、個々の現象は斯る統一力の發作顯現にして、そは統一力其物の各方面の發展を成就せん爲の分化開展と見るべきである。宇宙の斯る存在及過程の實相を正觀し説示せるのが正しい宇宙觀とは云ふのである。

若しこの宇宙觀に於て遺漏があり誤謬があつては人心の歸着を教ふる能はず從て宗教の正しき安住地を與ふること勿れり不可能である。物象の一面を根本の實在と見る唯物論の如きは物心の關係に於て盡す所なく、現象のみを見て本體を遺失せる極めて粗漏の見たるを以て、そは到底深奥ある宗教心と交渉する所なくして終るのである。唯物論に對する唯心論は人心に直接するを以て宗教的

一面の解決を與へぬでは無つが、其の極端あるものは無形の心象のみを高調して有形の物象を空華とし、夢幻として脚下の當相を輕視し拂拭し去るの結果に陥るのである。本體現象の關係に於ても二者を別途の存在と見差別の現象を妄惑とし平等の本體界を眞實とし、差別を離れて平等界裡に歸入するを所期とするあり。或は本體を一種の超絶力と見一切現象はこの力によつて造出され支配さるゝと説くもある。前者は絶對界に安住の地を得ん爲に、相對的の自己及周圍の存在を全然撥無し否定せんとするの途に出でざるを得ず。後者は超在せる絶對力が一切の造主であるを思ふとき、萬象は只此力に運轉され左右さるゝのみの木偶であり傀儡たるに止まざるを得ぬので、自己の安危浮沈は只管絶對力に委し去るの外ないことゝある。

げに宇宙の本體たる統一力は一切萬象を發生支持する力の根元である、而も萬象の發生するは統一力其物の自家開展で、それを化育支持する力が個々に内在しつゝ各自が自己を保持し各自の特殊傾

向を發揮せんとするので、それは各異の傾向を辿りつゝ一面その發生の源たる統一力自体の根幹に依つて統轄されるのである。斯く統一力は一面自らの分化せる個物の内裡に潜在して個々の存立を保ち、一面毎に個々を超越して一切を主宰し統一せるので、現象は本體の顯現、本體は現象に即して自家の發展を遂げつゝあるので、宇宙は實に斯る有機的の存在を形成し居るのである。

斯る宇宙の一多相即せる關係を指示するに當つても本體を冷かある理法眞理の體とし、斯る理體の發現なる萬象の相關因果のみを語つて終るときそれは宇宙の存在や過程の機械的事實の一面を觀照するに止まり、遂にそれ等存在の事實に對する深い意義に體達することなくして終るのである。ここに到つて單なる智的推理のみを以てしては宇宙の實相を看取し得べきでなく、そこには深い情意と明が奇理智との融和せる全人的の知見を以てそれを直觀せねばならぬ。(悟道とはそれである)智的一面の推理に依て看取し得る宇宙の本體は單なる

理法の體で、斯る理體の發作たる萬象の存在が冷かざる機械的の運行以外そこに何等の意味も見出せぬ。全人的の直觀を以て全實在に直接するとき宇宙の本體がドウしても一切を統攝する力としての生命體あることを感知せず居れぬ。そしてそれは單に一切を發生統理する生命の源、統一の力のみでなく、一切を成育し護持し包藏する愛の根元たるのでそれは神又は如來と云ふべき生ける不可思議の靈體と云はざるを得ぬ。全時にそれは自体を顯照しそが發展の規矩條然として一糸亂れざる理路を示しつつ、それを覺照する大なる理智そのもの、體でもある真にそれは眞善美完具せる結晶體と云ふべく、そしてそれは不斷に斯る功德を積集し開展し行く創造の大威力である。萬象は斯る靈體の仁智威徳の發現として各自その徳性を分有し個々その性能を發揮しつつ、根本靈體の秘密藏を光顯し宇宙を莊嚴すべき深大の意義と使命とを有し居るのである。

斯る直觀の實相を啓示せる宇宙觀が神觀、人生

觀の基く原理とあるのであるが、實はこれ神人兩觀の窮まる所に存するので、そわ先に屢々述べし如く宗教的要求あるものが自己其物に對する要求あるが故に、人生觀が毎に其第一歩の發足點とあるが當然で、それは自己の無力、不完全、苦惱に對する直念の感念を本として、それを反省考慮する所に生ずるのである。人生觀は實に現實の自己乃至人生に就ての觀想であり斯る現實の自己を脱却して自在の安住境を追想するときそこに神觀が生ずる、神觀は即ち自己の理想に就ての考察である。そしてこの自己の現實と理想との對比に想到してこれ等神人二者の關係、由來、本末、始終を追尋するときそれは遂に宇宙觀に來らざるを得ぬのである。宇宙觀に於ける本體現象相即の神人關係を直觀して。二者は二にして一、一にて二あるを了得するとき現實の自己が即時絶對の根據を得て、そこに大なる充足と安立とを來すに至るのである。

以下尙神人兩觀の内容を略述し、更に形式、行規等に就ても要見を記すべきであるが、次號に完結する筈である。實は斯る

方面にまで立込む考もなく漫然筆を運んでこゝに至つたが、今にして思ふと初めから節目を分けて幾分組織的に記述した方がよかつたのでノベツに書き來つた爲甚だ錯雜に陥つた嫌ひがある切に讀者の諒察を乞ふ次第である。(未完)
(大正七年九月廿六日)

當家顯本論概要 高二 菊池泰旭

第一章 顯本論の原由

一、教說上之原由

世尊出世の大事は末世之赴レ機然かも末法爲正は是佛意の樞要、故に世尊三個の鳳詔二個之諫曉以て末世弘教の導師を任せんと爲玉ふや他方來過八恒沙の大衆強請すと雖も末世の衆機弊惡にして三毒四魔毒刃を逞ふす『當著忍辱鎧爲說是經故忍此諸難事我不愛身命』の居士に非らずんば不可能あるべし『止ミ善男子不レ須ヒ汝等ノ護ニ持スル此經ハと特に下方の本化を召す。茲に唱導之首各々將ヒ六萬恒沙ノ眷屬ヲて虚空會上に涌出し右繞三師恭敬禮拜嚴かに佛に問尋す、是を見聞せる一座の大衆

懷疑の念勃々として彌勤等『從昔已來不見不聞』と驚歎せり。愚詞を弄せんより實る經を引かん。經文、能其様を具らかにす (混出品)

佛昔從釋種 出家近伽耶 座於菩提樹 爾來尙未久此諸 佛子等 其數不可量 久已行佛道乃至

譬如少壯人 年始二十五 示人百歲子 髮自而面皺 是等我所生 子亦說是父 父少而子老 舉世所不信

茲に大聖世尊三誠懇篤に且く五百塵點の喩に倚せて久遠本地を顯發し玉ふ 經に曰く

『爲是人說我少出家得阿耨多羅三藐三菩提然我實成佛已來久遠若斯』文 (壽量品)

是實に顯本論基脚也

二、祖判上之原由

宗祖開目抄下(十二答丁四己下)寶塔、涌出、壽量三品の生起々盡を丁寧に懇示し玉ふの今は『御義に傳』之網格に隨て宗祖の顯本思想を窺がひ併せて當家顯本論の原由を探ぐらんと欲す。